

氏 名	ひろ かわ とも き 廣 川 智 貴
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 314 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	ハインリヒ・フォン・クライストの文体 ——文体論からのアプローチ——

論文調査委員	(主 査) 助教授 松 村 朋 彦	教 授 西 村 雅 樹	教 授 宮 内 弘
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ドイツの作家ハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) の散文に見られる文体的特徴を、文体論の立場から考察するものである。

まず序において、これまでこの作家の作品が、歴史的なコンテキストや哲学的な観点から読まれることが多かったことを指摘して、文体論からのアプローチが有益であることを述べる。クライストは、みずからの作品や生活について語ることが少なかった作家である。したがって、研究史においては歴史的な空所箇所を埋める試みが盛んであり、その研究の結果が作品解釈にも応用されることがしばしばであった。しかし、このようなアプローチでは、この作家のテキストのもつ魅力を見逃してしまうことになる。

クライストのテキストは、独特の文体によって構成されている。なるほど、作品内在解釈によるアプローチをはじめとして、テキストとしてのクライストを論じる試みはこれまでも存在してきた。しかし、それらの論考には、前半部分でクライストの言語懷疑あるいは哲学的問題を論じ、これを前提としてテキストを考察しているものが多い。このような読み方それ自体は非常に興味深いものであるが、これではテキストを観察する視野が最初から制限されることになる。そこで本論文においては、テキストをテキストとして読む理論のひとつ、すなわち、文体論の観点から読むことを提案する。そうすることで、これまで見過ごされてきたクライストの一面を垣間みることができると考えるからである。

第1部は2つの章からなっている。第1章においては、文体論という領域が少なくともドイツ語学・文学においてはそれほど認知されていないという事情を考慮して、文体論の輪郭を提示し、その有用性を述べている。ここでは、レオ・シュビッツァーを祖とする現代文体論が、言語学と文学の求心力として成立したことを強調し、文体論と言語理論が密接な関係にあることを論じている。具体的には、テキスト言語学と機能文法が文体論に適した言語理論であることを示し、これらの理論によってテキストにおけるどのような現象が明らかになるのかを示唆している。そして文体論と言語理論との関連を論じたあと、文学教育における文体論の有用性を主張している。とりわけドイツ語圏の文体論は理論に偏向しがちで、テキストを分析するという実践に乏しい。その意味でも、文学教育の場で文体論を応用することは、文体論そのものの行きづまりを解消する可能性をもつ。

第1部第2章では、文体概念そのものを扱っている。文体という現象は、われわれが考えるほど単純ではない。文体論においても事情は同じであるが、多様性のなかにも共通項は存在する。まず現代の文体論において、文体を論じるときの前提となっているのが、個別的言語表現としての文体である。文体とは長らく規範的なものであったのだが、18世紀から19世紀にかけてそのような文体観は意味の急変を経験する。とりわけドイツ語圏では、ビュフォンの格言「文は人なり」が大きな影響を及ぼすことになった。ビュフォンはこの言葉によって大げさなことをいうつもりはなかったが、当時の知識人がこれを誤解し、その結果として文体は規範的な意味を失い、その個性が強調されるようになった。

このようにして得られた文体観は、現代においては言語理論とも密接に関係している。これは、文体論の成立の経緯から

して当然のことであった。言語学がラングとしての言語を研究するのにいそがしく、パロールとしての側面を等閑視していた状況が文体論成立の一因でもあったからである。とりわけ、選択としての文体という考えは、変形文法、機能文法などによって理論的裏づけを得、今日の文体観を支えている。また、逸脱としての文体という考えも、文体を書き手の側からだけでなく、読者の側からも観察することを可能とするゆえに不可欠なものであるといえる。

第2部は4つの章から構成されており、具体的にクライストの文体が論じられている。第1章では、クライストの短編『ロカルノの女乞食 (Das Bettelweib von Locarno)』、『チリの地震 (Das Erdbeben in Chili)』を資料とし、機能文法における他動性 (transitivity) によりテキストを分析している。ここでいう他動性とは、体験を言語分節化したものであり、「関与者」や「過程」などによって構成されるものをさす。クライストの作品は、「脆い世界 (gebrechliche Welt)」で覆われている。この作家にとっては、「外界」とは「偶然」なもの、「不安定」なものであった。そのような外界の出来事にたいして、人はどう応じればよいのか。語り手が語るのが、まさにこのことなのである。この章であつかった作品では、語り手は一貫した他動性のネットワークを選択することで、中心人物たち (前者の作品では侯爵、後者ではイエローニモ) が無力な存在であることを強調している。

第2章では、クライストが編集した「ベルリント刊新聞 (Berliner Abendblätter)」を資料にして、動詞文体で知られるこの作家が、じつは、すぐれた名詞文体の書き手でもあったことを主張している。一般に名詞文体について論じられるとき、その形式と機能の記述に終始することが多いが、本章では名詞文体の機能を広範に記述し、この文体が読者にあたえる効果にもできるかぎりふれている。具体的には、補充語 (Supplemente) としての名詞化、機能動詞結合を中心に論じている。

第3章では、クライストの短編『拾い子 (Der Findling)』を結束性の観点から論じている。結束性とはテキスト言語学の術語で、テキストの統一性を保証する諸要素のことをさす。文体論にとって重要なのは、語り手がテキストの結束をいかなる手段によっておこなうかということなのである。

クライストの語り手は、客観的であるとしばしばいわれる。作中人物たちの周囲に起こる出来事を描写するという意味では、つまり、物語内容の点からみれば、たしかに客観的であるように思われる。しかし、結束性を分析した結果明らかになった語り手像は、このような通説とは若干異なるものである。つまり、『拾い子』の語り手は、物語内容を淡々と語るだけでなく、かなり読者を意識したサービス精神にあふれた語り手なのである。具体的には、指示、接続、語彙的結束による結束を用いることで読者を一定の方向に導き、作品の理解を容易にしている。

第4章では、クライストの短編『決闘 (Der Zweikampf)』の冒頭を、いわゆる主語の用法という観点から分析している。主語という現象は、われわれが一般に考えるほど単純ではない。そこで本章では、H. J. ヘリンガー、M. A. K. ハリデーといった言語学者による分類 (「主題」、「主語」、「行為者」) を参照してテキストを分析している。

『決闘』は、いわゆる分析的技法で構成されているといわれる。しかし、以上の分類にしたがって主語の用法を仔細に分析すると、語り手は冒頭部分ですでに犯人 (赤鬚伯) をほのめかすシグナルを発していることがわかる。この小説の山場は、犯人をめぐるの神前裁判での「決闘」なのであるが、その決闘の結果をすでに冒頭が暗示していることは意義ぶかい。

論文審査の結果の要旨

ハインリヒ・フォン・クライスト (1777-1811) は、ドイツを代表する劇作家の一人であると同時に、小説の分野においてもすぐれた作品を残している。プロイセンの軍人の家系に生まれながら軍隊生活になじむことができず、カントの哲学から絶対的認識の不可能性を読みとって深い衝撃をうけ、ナポレオンの支配にたいして愛国主義の論陣をはり、不治の病におかされた人妻とともに自殺をとげたこの作家の、波乱と謎にみちた生涯は、こうした伝記的事実に作品解釈の鍵を求めようとする研究傾向を生みだしてきた。それにたいして近年では、社会史、ポスト構造主義、ディスクール分析、ジェンダー論などの観点から、クライストの文学を新たに読みなおそうとする傾向がみとめられる。

論者は、こうした研究動向をふまえたうえで、歴史的なコンテキストや思想的な観点からクライストを読もうとする従来の研究では、この作家のテキストのもつ独自の魅力が見逃されてしまうと主張する。むろんこれまでも、クライストの言語そのものに光を当てようとする研究がなかったわけではない。だが、そうした研究でも多くの場合、クライストの言語懐疑といった思想的な問題が議論の前提とされることによって、テキスト理解の可能性が狭められてしまうと論者は批判する。

クライストの文学をテキストとして読むために、論者は文体論という方法を選択する。近年のドイツ語圏の文体論は、理論への偏向が強く、文学テキストの分析に文体論が適用される例は多くない。そこで論者は、M. A. K. ハリデーを中心とする英語圏の文体論研究の成果を、クライストのテキスト分析に応用しようと試みる。こうした試みは、従来のドイツ文学研究においてはほとんどなされてこなかったものであり、この点に本論文の大きな特色がある。

「文体論と文体」と題された第1部で、論者は文体論と文体にかんする理論的考察をおこなっている。第1章では、現代の文体論が文学研究と言語学研究とのあいだにはたらく求心力として成立した経緯が述べられ、テキスト言語学や機能文法などの言語理論が、「結束性」(cohesion)や「他動性」(transitivity)といった概念によって、文学テキストの分析に寄与しうることが示される。第2章では、文体の概念が、18世紀から19世紀にかけてしだいに規範としての意味を失い、その個別性が強調されるようになった過程が跡づけられ、「選択としての文体」と「逸脱としての文体」という、現代の文体論における2つの文体観が検証される。

「ハインリヒ・フォン・クライストの文体」と題された第2部で、論者はクライストの散文のもつ文体的特質を、4つの観点から析出する。第1章では、『ロカルノの女乞食』と『チリの地震』という2篇の短編小説が、機能文法における「他動性」の観点から考察される。論者は、これらの作品にあらわれる動詞型の詳細な分析によって、登場人物たちが外界の脅威にたいして無力な存在として描き出されていることを明らかにする。第2章では、クライストが編集・執筆にあたっていた「ベルリント刊新聞」の記事が考察の対象となる。論者はここで、作家としてのクライストが、複雑に入り組んだ動詞文体の書き手として知られているのとは対照的に、ジャーナリストとしてのクライストが、簡潔で凝縮された名詞文体の名手であったことを浮き彫りにする。第3章では、短編小説『拾い子』が、テキスト言語学における「結束性」の観点から論じられる。論者は、テキストに統一性を与える要素としての代名詞、接続詞、アナグラム、同一語の反復などに着目することによって、通常は客観的な報告者と見なされているクライストの語り手が、読者を一定の方向へ導こうとするきわめて意識的な存在でもあることを指摘する。第4章では、短編小説『決闘』の冒頭の一節が、主語の用法という観点から分析される。論者は、「主題」、「主語」、「行為者」という3つの側面から、登場人物たちの描写を綿密に検討し、結末にいたって初めて事件の真相が解明されるこの物語の冒頭部で、語り手はすでに結末を暗示するシグナルを発しているという解釈を提示する。

このようにして、論者は文体論の立場からクライストのテキストに新たな照明を当てることに成功している。そこから浮かび上がってくるのは、言語への懐疑にとらわれた悲劇作家という従来のクライスト像とは異なる、多様な言語表現を自在に駆使する言語芸術家としてのクライスト像なのである。

むろん本論文にも、今後の課題としてさらに望まれる点は少なくない。論者は、文体論研究とクライスト研究の両面にわたって幅広く文献を渉猟しているが、英語圏の文体論にかんしては、最新の動向が十分に消化されているとはいえない面がある。また、クライストの作品解釈についても、いっそう踏み込んだ論述が望まれる。

だが、本論文の試みが、従来のドイツ文学研究においてほとんど先例のないものであることを考えるなら、クライスト研究のみならず、広くドイツ文学研究の分野に新たな方向を切り開こうとする論者の意欲は、高く評価することができる。論者が本論文の成果をさらに発展させて、戯曲作品も視野に入れた、より包括的なクライストの文体研究を完成させることが期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2005年2月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。